

提言 町の花「菊」を活かしたまちづくりについて

提言の背景・趣旨

「菊」は、平和な文化の里をめざす町民の崇高な精神と知性を表す意味で、町制 30 周年を記念し、町の花として制定された。

本町と菊との関わりは深く、特に「西川菊まつり」は昭和 3 年から始まり、一時戦争により中断したものの今年で 80 回目を数え、県内でも南陽市に次ぐ伝統を持っている。また、内閣総理大臣賞や文部科学大臣賞などの国務大臣賞は、県内においても西川町と南陽市だけでしか授賞をしていない大変価値のある賞となっており、全国でも菊の花の美しさや栽培技術は高く評価されているところである。

その一方で、菊づくりを行なっている「三山重陽会」のメンバーも高齢化が進み、後継者の育成が課題となっている。また、「菊」に対する町民の関心度や町行政の取り組みは決して高いとはいえない状況である。

第 6 次西川町総合計画において、町の資源を活かした観光の推進などが盛られている。「菊」を町の資源の 1 つとして捉え、町の花である「菊」を活かしたまちづくりを推進するため、次の施策について提言する。

提言内容

1. 町の花「菊」に対する町民等の意識醸成について

現在、菊づくりの主体となっている三山重陽会の会員は極めて高齢化しており、後継者不足が大きな課題となっている。優れた菊の栽培技術の根を絶やさないためにも、三山重陽会の協力を得て南陽市や二本松市などが行なっているような菊づくり講習会を町が主体となって実施すること。

町の花が「菊」であるという意識を醸成するには、小さい頃からの教育が必要である。現在、小学校 4 年生が玉菊の栽培を行なっているが、さらに食用菊を栽培し、給食食材として活用するなどの自然学習を、町が推し進めている保・小・中一貫教育の 1 つとして取り組むこと。

菊づくりを盛り上げるためには、一部の地域や町民、企業だけの取り組みでは成功しない。町全体として各世帯、各地域、各企業が菊づくりを行うような施策を展開すること。

2．賑わいのある、観光誘客の増加をめざした菊まつりの創造について

今年で 80 回を数える菊まつりは、町の伝統を誇る事業の 1 つである。極めて価値のある内閣総理大臣賞も含めて、方策を講じながら、まつりを継続すること。

現在の菊まつりは、会場が交流センターあいべの駐車場であり、来場者は菊に関心をもっている方が多いと考えられる。観光誘客の拡大を推進するためにも、町の観光拠点施設であり国道 112 号線沿いにある月山銘水館周辺で実施することも含め、会場の見直しを検討すること。また、賑わいある祭りにするためにも、多くの町民から募ることや他市町村からの出品をお願いするなどにより、展示数量を増加すること。

3．「菊」を活かした町内産業の活性化について

食用菊については、現在自家消費が中心であり、町も振興作物として位置付けていない。また、食用菊には動脈硬化など生活習慣病の元凶である悪玉コレステロールを抑制する成分が含まれている。特に「もってのほか」に多く含まれており、発ガン予防に優れていることが、山形県の衛生研究所で実証されている。町内経済の循環や健康寿命の延伸という観点から、転作物の 1 つとして食用菊を振興し、出荷に結び付けるような方策を展開すること。

食用菊を活用した新たな商品の開発を検討し、6 次産業化に結び付けること。